

The Hungry Dog
1941
by Frank Gruber

目次

はらぺこ犬の秘密

5

訳者あとがき
271

主要登場人物

- ジヨニー・フレッチャー……………書籍セールスマン
サム・クラッグ……………ジヨニーの相棒
ジュリアス・クラッグ……………サムの伯父。故人
ジョージ・トンプキンス……………ジュリアスが引き取った亡き知人の息子
ジェラルド・ポッツ……………ジュリアスの顧問弁護士
アーサー・ビンズ……………〈クラッグ・ドッグ・ファーム〉の飼育員
スーザン・ウエップ……………クラッグ家の向かいに住む娘
ジェームズ・ウエップ……………スーザンの父親
オーガスト・カンケル……………デミング第一中央銀行の頭取
アンドリュー・ペンドルトン……………スロットマシン製造業者
ピート・スラット……………ギャンブラー
リンドストローム……………保安官

第一章

ある日のこと、ブロードウェイと四十四丁目が交わる街角で、小柄な男が箱に上がって、一ドル紙幣を七十五セントで売ろうとしていた。買う者が誰もいないと、そのうち男はひどく妙な振る舞いをはじめ、やむなくやってきた警察が男をワゴン車に乗せて運び去った。

ジョニー・フレッチャーも、値引きした一ドル紙幣を買うチャンスに飛びつかなかった一人だった。翌朝の新聞で、その小柄な男が正気ではなく、安売りしていた紙幣が本物だったと知ると、彼は外に出かけ、軽く酔っ払った。

そしてその翌日、四十五丁目を歩いていると、ぼろぼろの麦わら帽子が歩道に落ちていた。思いきり蹴飛ばしたところ——帽子の下に煉瓦が一つあった。

なんとか歩けるようになったとき、ジョニーは一ドル紙幣を売っていた頭のおかしな小男のことを、さほどいまいまいしく感じなくなっていた。長い目で見れば、疑り深いほうが身のためなのだ。

それで今日、ジョニーは自分が用意した演台に立って、うさんくさそうな顔ばかりが並ぶ観衆を見渡し、たいして稼げそうにないと悟った。

隣では、サム・クラッグが歩道に足を大きく開いて上体をかがめ、息を吸い込みはじめていた。肺が空気で満たされていくにつれて、身体を起こしていく。筋肉の盛り上がるたくましい胸に巻きつけ

られた鎖が肌食い込み、サムは全身に力を込めるあまり顔が紅潮した。

ジョニーは声を張り上げた。「さあ、ご注目！ 紳士ならびに淑女諸君、とくとごらんあれ、この男を！ 馬が引いても切れなかつた鎖だ。これを彼は引きちぎろうとしている。そんなことが可能なのか？ 彼に鎖が引きちぎれるのか？ できるはずもない。どだい、人間には無理なこと。大力無双の若きサムスンでも不可能だ。たとえ——」

次の瞬間、鎖がちぎれた。鎖はサムの身体からはじけ飛んで、その一方の端が太った男の顔を直撃しそうになる。

「なんとということか！」ジョニーが叫ぶ。「やつてのけた！ 鋼鉄製の鎖を引きちぎつたぞ！ 先ほどぶち切つた軍隊ベルトに負けず劣らず、楽々と引きちぎつてみせた。これでわたしの言葉を信じるかね？ この若きサムスンが生きている最強の男だと？ なんだつて？ 強く健康になりたい？ なれるとも、淑女がたがうつとり見惚れるような筋肉をつけることができる。若きサムスンがこれほどまでになった生命力の秘密を手に入れられるのだ。すべてこの本、これからご提供する『だれでもサムスンになれる』に書いてある。十ドルしないどころか、五ドルもしない。わずか、たつたの二ドル九十五セントで……」

「よく言うぜー」十番街の西側にいたゲジゲジ眉の疑り深そうな男が野次を飛ばした。「インチキだ。鎖は見せかけだけだ。そのひよっこもな」

「ひよっこだと？」サムが食つてかかった。「誰がひよっこだ？」

「てめえに決まつてんだろ」ゲジゲジ眉が言い返す。体重が二百四十ポンドはあり、身体は重軛馬並じゅうばんばみのごつい筋肉のかたまりだ。

「よせ、サム！」 ジョニーは悲鳴のような声をあげた。「手を出してはだめだ。彼を殺してしまいかねない……」

「おれを殺す？」 野次男が鼻で笑った。「こっちは、そいつみたいなひよっこを毎晩リングで沈めてたんだぜ」

タートルネックのセーターを着た、ゲジゲジ眉をもしのぐ体格の男が相づちを打った。「そうとも。こいつらはペテン師だ。しかも、見かけ倒しのな。時間がありゃ、こいつらで通りをきれいにモップがけしてやるのによ」

「うおおお！」 堪忍袋の緒が切れたサムが飛びかかっていった。

「いちゃもんをつけてきた二人の男もサムに突進していく。二人は両サイドからサムに向かっていたが、三人の身体がぶつかり合ったときに起こったことは、展開が速すぎて、興奮に沸く観衆は誰一人として、なにがどうなったのかはつきりわからなかった。ただ、大きなうなり声があがったかと思うと、腕や脚や身体が疾風のごとく動き、気がついたときには、サム・クラッグ、またの名を若きサムスンがそれぞれの腕で二人にヘッドロックをかけ、男たちが痛みに泣きわめいていた。

サムはどうだとばかりに、集まってきていた人々に笑みを向け、いきなり両腕を身体の前へもっていった。当然ながら、二人の頭もついてきて、勢いよくぶつかった。ポロの木製の槌マレットで球を打つとよく似た音がした。

そのあとサムは敗残者たちを放してやり、うしろへと下がった。朦朧としているならず者たちが手と膝で這って逃げるなか、サムは埃を払うように手を叩き合わせた。

この状況を驚嘆の表情で見守っていたジョニーは、ふと我に返って、大声で言った。「諸君、納得

されただろうか？ 若きサムスンが荒くれ者相手にどう立ち回ったか、その目でごらんになったらう？ この彼が見かけ倒しだとも？ いや、ありがとう！ さあ、どうぞ。二ドル九十五セントだ。ええ、そちらさんも？」

あつけないものだった。サム・クラッグのささやかな「実演」は、十分間におよぶジョニーの口上よりずっと観衆に効果があった。男たちが我先にと本を求めて押し寄せ、ジョニーは右手でも左手でも本を渡していった。五分後には、用意してあつた本はすべてさばけてしまい、ジョニーとサムも人混みに紛れていった。

二人が通りの角を曲がると、サムがこっぴどくやつつけたならず者たちが、ある戸口から姿を現した。

「いいかい、ボス？」二人のうちの一人が声をかけてきた。

ジョニーはくすくすと笑った。「いいとも、きみたち。ほら、取り分だ、一人につき二ドル。明日も頼むかもしれない」

「いいぜ、こっちはかまわない。おれらにとつちや楽な稼ぎさ」

「ちよつと待てよ」サムが怖い顔をした。「おまえたちのどつちか、おれに噛みついただろう。今後、噛むのはなしだぞ。場が盛り上がるよう、ちよいと騒ぎ立てるのはかまわない。だが、噛むのはだめだ。いいな？」

「わかつたよ」タートルネックのセーターを着た男が答えた。「噛むつもりはなかつたんだが、あんたがおれの喉仏をつぶしにかかつてきたもんだから、つい我を忘れちまつたんだ」

「そうか。だがな、次は我を忘れてするな。さもないと、おれのほうが我を忘れて、おまえたちの

鼻をへし折っちまうかもしれねえぞ」

金で雇った二人のサクラのもとから離れたあと、ジョニーは大きく伸びをした。「さっきの、実演は、これまででも最高の出来だったな、サム。本が倍も売れたぜ」

「飛ぶように売れたな、ジョニー。あんなふうにはやってるあんたが好きなんだ。仕事に専念して、たわごとはいっさいなし。それがだよ、これまでの生き方を考えてみると——家賃滞納で大家にぶちのめされたり、代金が払えるはずもないものを買ったり、取り立て屋を脅したり……ああ、もう！ 思い返しただけでも震えがくるぜ」

「そう言うなよ。おれだってそんな生き方は望んじやないが、機転を働かすいい訓練だ。知性が磨かれる」

二人は〈四十五丁目ホテル〉の前まで来ていたので、中へ入った。ボーイ長のエディ・ミラーが気づいて、すっ飛んできた。

「ちよっと、ミスター・フレッチャー」エディはにこりともせずと言った。「なにか起きてます。用心なされたほうがいいですよ。ピーボディが午後からずっと、空っぽになった鳥かごの中にいる猫みたいに、にやにやしてるんです。ある男性がミスター・クラッグを探しに来た直後からですよ」

「男がサムを探しに来た？」ジョニーは聞き返した。「どんなやつだ？ 刑事か？」

サムは顔をしかめた。「なにもやっちゃいないぜ」

ボーイ長は肩をすくめた。「警察じゃないと思います。そんなふうには見えませんでした。ですが、もしかすると——借金取りかも」

ジョニーの表情が明るくなった。「そいつはありえない。これまでにないことだが、いまは誰から

も一セントだって借りちやいなんだ。まあ、ほとんど誰からも、だが。ともかく、借金取りのはずはない。サムがおれになんの相談もなく物を買うことはないからな。そうだろう、サム？」

「まずい」とボーイ長。「ピーボデイだ。あいつには言わないで……」ミラーは最後まで言わずに去っていった。

ホテル・マネジャーのミスター・ピーボデイは、シャーロック・ホームズ俳優のベイジル・ラスボーンが個性派俳優のピーター・ローレに変装しているような感じだった。ピーボデイの人生最良のときというのは、宿泊料を支払わない客を部屋から締め出したときだ。とりわけ、雨や雪が降っている日にそういった卑劣なことを嬉々として行動に移す。

「ああ、ミスター・フレッチャー！」ピーボデイが大声で呼びかけてきた。「それに、ミスター・クラッグも。このすてきな午後を、お二人はいかがお過ごしでしたか？」

「最悪さ、あなたのご期待どおりな」ジョニーはぶつきらぼうに言葉を返した。「用件はなんだ、ピーボデイ。なんで呼び止めた？」

ピーボデイが冷ややかな笑みを浮かべた。「ある男性がミスター・クラッグを探しに来ていたんですよ。弁護士がね……」

「弁護士？ 名前は？」

「ホフナジェル。名刺を置いていきましたよ。これがそうです。ミスター・クラッグに至急、連絡をくれるよう……さもないと、と伝言も残していきました」

ジョニーはホテル・マネジャーの手から名刺をひったくって、サムに突きだした。「さもないと、なんてねえよ！ 弁護士はお呼びじゃない。ほら、サム、この弁護士に電話しろ。それと、フロント

の電話を使え。おれたちに後ろ暗いところなどないとピーボデイにわからせるためにな」

サムは眉間にしわを寄せて名刺をじつくりと眺めた。「このホフナジェルって名前、まったく心当たりがないぜ、ジョニー。ひよつとしてあんたは？……」

「いや、知らない。誰もおれたちに用事なんてあるわけがないんだ——いまはな。弁護士だろうが、おまわりだろうが、恐れることはない」ジョニーはピーボデイをにらみつけた。

しばらく受話器に手を置いていたものの、やがてサムは、ため息をつきながらそれを持ち上げた。相手が出ると、「ミスター・ホフナジェル？　サム・クラックというもんだ。おれを探しているそうだが……なんだって？……」

訳者あとがき

アメリカの作家フランク・グルーパー（一九〇四―一九六九）によるジョニー・フレッチャーとサム・クラッグのシリーズ三作目をお届けします。

ジョニーとサムは怪しげな肉体改造本の『実演販売』を生業としています。頭の回転が速く口達者なジョニーが、筋骨たくましいサムを『実践後』のモデルとして、この本に書かれています。実践すれば誰でも屈強な男になれると売り込むわけです。ジョニーに言わせれば、彼は『国内屈指の、とびきり優秀なセールスマン』。でも残念ながら、本が飛ぶように売れることはめったになく、二人はたいていお金に困っています。それが本作では、サムが疎遠だった伯父の多額な遺産を相続して、ついに貧乏生活とはおさらば！ となるはずだったのですが、伯父が殺害されていたことがわかり、遺産にも落とし穴があつて……

フランク・グルーパーは才能豊かな多作家として知られていますが、なかでも有名なのが、このジョニーとサムの凸凹コンビが活躍するユーモア・ミステリ・シリーズ（全十四作）です。二人はなぜかいつも殺人事件に巻き込まれ、容疑をかけられて、いやおうなく（いえ、ジョニーは嬉々として！）犯人捜しに乗り出します。テンポの速いストーリー展開、フーダニットやホワイダニットとしての読みごたえもさることながら、ジョニーとサムの軽妙なやりとり、減らず口の応酬、窮地に立た

されたジョニーが考え出すとんでもないアイデアの数々といったものこそ、本シリーズが愛される所以ではないでしょうか。

この魅力たっぷりの〈ジョニー&サム〉を教えてください。昨年暮れに惜しくも世を去られた仁賀克雄氏でした。氏は生前、本シリーズの楽しさ、面白さを熱く語っていらして、これまで未訳だった九作品もすべて翻訳・刊行されるのを心待ちにしておられました。さまざまな御縁があって、まずはその一作品を訳すことができたのは、望外の喜びです。

〈ジョニー&サム〉シリーズの初版タイトルを発表順に記しておきます。

- ① The French Key (1940) 『フランス鍵の秘密』早川書房
- ② The Laughing Fox (1940) 『笑うきつね』早川書房
- ③ The Hungry Dog (1941) 本書
- ④ The Navy Colt (1941) 『海軍拳銃』早川書房、『コルト拳銃の謎』東京創元社
- ⑤ The Talking Clock (1941)
- ⑥ The Gift Horse (1942)
- ⑦ The Mighty Blockhead (1942)
- ⑧ The Silver Tombstone (1945) 『トーストタウンの謎』東京創元社
- ⑨ The Honest Dealer (1947)
- ⑩ The Whispering Master (1947) 『噂のレコード原盤の秘密』論創社
- ⑪ The Scarlet Feather (1948)

- ⑫ The Leather Duke (1949)
- ⑬ The Limping Goose (1954)
- ⑭ Swing Low, Swing Dead (1964)

最後に、この素敵な作品に巡り合わせてくださった仁賀克雄氏に心からの感謝を捧げます。

二〇一八年七月

〔著者〕

フランク・グルーバー

アメリカ、ミネソタ州生まれ。9歳で新聞の売り子として働く。貧しい青年が苦難の末、大富豪になるホレイショ・アルジャー・ジュニアの立身出世物語に夢中になり作家を志す。農業誌の編集を経て、〈ブラック・マスク〉などのパルプ雑誌を中心に作品を発表する。代表作に「フランス鍵の秘密」(40)、「笑うきつね」(40)、The Pulp Jungle (67) など。

〔訳者〕

森沢くみ子（もりさわ・くみこ）

香川県生まれ。英米文学翻訳家。主な訳書にヘンリー・スレッサー『最期の言葉』（論創社）、エリック・キース『ムーンズエンド荘の殺人』（東京創元社）、エラリー・クイーン『熱く冷たいアリバイ』（原書房）、ブラム・ストーカー『七つ星の宝石』（アトリエサード）など。

はらべこ^{いぬ}犬^{ひみつ}の秘密

——論創海外ミステリ 214

2018年7月20日 初版第1刷印刷

2018年7月30日 初版第1刷発行

著者 フランク・グルーバー

訳者 森沢くみ子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1741-5

落丁・乱丁本はお取り替えいたします